当院における過去8年間の感染性心内膜炎患者の血液培養検査結果について

◎柳谷 貴子[1)]、高橋 順也[1)]、渡辺 直樹[1)]、米沢 太亨[1)]、斉藤 久美子[1)]、佐渡 正敏[1)]、赤坂 和美[1)]、藤井 聡[1)]
旭川医科大学病院[1)]

【目的】感染性心内膜炎（IE）の診断において、血液培養検査は、起炎菌の同定および抗菌薬の適切な選択のために重要な検査の1つである。当院のIE症例における血液培養の実施状況と検出菌の動向を調査した。

【対象と方法】2011年1月から2018年12月までの8年間に、当院でIEと診断され加療を行った58例を対象とし、血液培養検査と心エコー検査の結果について調査した。ペースメーカー感染は本調査の対象から除外した。

【結果】対象患者の平均年齢は、64±18歳であり、70代以上が45%であった。血液培養の実施頻度は93%（54/58例）であり、陽性率は57%（31/54例）であった。主な血液培養検出菌は、*Staphylococcus aureus* が11例、Coagulase negative staphylococci（CNS）が4例、*Streptococcus* 属が13例、*Enterococcus* 属が2例、*Corynebacterium* 属が1例であり、血液培養陰性は23例であった。死亡例は、19%（11/58例）であり、メチシリン感性 *S. aureus* が1例、メチシリン耐性 *S. aureus*（MRSA）が4例と *S. aureus* が最多であった。また、急速に進行するMRSA感染もみられた。主要な検出菌である *S. aureus* は、血液培養陽性全患者の12%（303/2486名、年次推移 10～14%）を占め、IE患者は、*S. aureus* 全検出患者の4%（11/303名、年次推移 2～9%）であった。IE患者の40%（23/58例）は、血液培養が陰性であったが、83%（19/23例）は、血液培養採取前に既に抗菌薬が投与されていた。また、IEの予後不良因子である弁輪部膿瘍を心エコー検査で疑った重症例は14例で、*S. aureus* が5例、CNS が2例、*Streptococcus* 属が1例、*Enterococcus* 属が1例、血液培養陰性が5例であった。

【まとめ】血液培養の検出菌が *S. aureus* であった場合に、IE患者である頻度は最大9%であった。なかでも当院のMRSAによるIE患者は、重症例や急速に進行した症例であった。このことから、*S. aureus* 検出例では、特にIEである可能性を念頭に置き、主治医には迅速に結果報告することが重要であると考えられた。

連絡先：0166-69-3364